



■ 今月のメッセンジャー

小林 光信 (こばやし みつのぶ)
栃木県・真岡カルバリの丘チャペル牧師

私の幼少期時代（今から40年以上前）、スボ根アニメの代表といえば「巨人の星」でした。飛雄馬の父（一徹）は、頑固一徹で飛雄馬を厳しく育てていましたが、目に焼き付いている名場面は、父発明の大リーグボール養成ギブスを飛雄馬に取り付け、スプリングの負荷を利用して筋肉を鍛えさせていたシーンです。現代では立派な虐待であると思いますが、しかし、見方を変えれば父の愛情が込められた「特別仕様品」であつたのかも……？ そして飛雄馬は、それをキシキシいわせながらボールを投げて特訓する。そんな姿をテレビで放映してもOKな時代でした。

しかし、現代ほど「ど根性精神」がはやらない

時代は、ないのではないでしようか。現代は、親が子離れできず、子も親離れができない、そんな過剰すぎる甘えた関係性の時代と言えると思います。（逆に、放任する無関心の関係性もバランスを欠いた過剰なのだと思います。）

以前、私と同年代の方が、息子の担任教師になつてくださったことがありましたが、その先生が言つておられました。「最近の若い先生は……」

つまり、世代間のギャップは、キリスト教会の世界だけではなく社会全体に言えることなのだと思います。

変わらない聖書の福音

しかし、どんなに時代が変化しても絶対に変わらないものがあります。永遠の書物である「聖書」です。聖書を読んでみると、そこには「福音（グッドニュース）」がちりばめられています。福音は「恵み」であり、救いは「行いではなく信仰」だけが必要とされています。しかし「福音には神様の義が啓示されている」とも書いてあります。

聖書を土台とした人間教育

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によつて生きる。』と書いてあるとおりです。」（ローマ1・16～17）

神様の御子であられたイエス・キリストの身代わりの十字架は、私たち人間の罪を背負われた命懸けの「愛」の行為です。しかし、父なる神様に

とつての十字架は、神様ご自身の「義」を表すために、何が何でも罪の刑罰を執行しなければならなかつた、まさに正義を貫く処刑台でした。つまり一ミリも手抜きをしない厳格な神様の「義」の行為が、イエス・キリストの十字架の死（死んで罪の刑罰を受けられた）に、明確に啓示されていります。

罪に対する神様の怒りの矛先が向けられたイエス・キリストにとっては、理不尽な扱いであり、罪を犯さなかつた神の御子としては、耐え難い苦

痛と苦悩であつたはずです。しかし、イエス・キリストは最後の最後まで（完了したと宣言するまで）、十字架から降りてこなかつたのです。そこには靈的な力と共に、暴力や痛みや屈辱に耐え抜く精神力も必要とされたはずです。人類史上、イエス・キリストほど精神力の強い方はおられなかつたのではないか。この「イエス・キリストの愛に基づく神様の義」によつて、人類は信じる信仰だけで「罪が赦されて救われること」が可能となるのです。

忍耐力と精神力

旧約聖書にも新約聖書にも貫いている一つのメッセージ、それは「忍耐」であると思います。例えばアブラハムは、約束の子イサクが与えられるまでに25年もの間、待たなければなりませんでした。新約聖書の書簡を書いたパウロも「忍耐」を語っています。

「またキリストによつて、いま私たちの立つているこの恵みに信仰によつて導き入れられ

聖書のメッセージ

た私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。

それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」

（ローマ5・2～4）

忍耐力とは精神力と深い関係があります。例えば、ある若い伝道者が、先輩牧師にこんなお願いをしたそうです。「先生、忍耐力がつくようにお祈りしてください！」そこで先輩牧師は「主よ、この若者が忍耐力を身に着けるために、忍耐することを学ぶことができますように！」と祈ると、若い伝道者が文句を言いました。「先生、忍耐することを学びたいのではなく、忍耐力が欲しいのです！」すると先輩牧師が諭すように言いました。「あんな、忍耐することを学ばずして忍耐力を身に着けることはできないぞ！」その通りではないでしょうか。忍耐力とは、忍耐することを精神（ハート）で学ぶプロセスをスキップして、お手軽に得ることは絶対にできません。

私の体験

私は学生時代の10年間、陸上部に所属して10メートルを走り続けました。走つて天国まで行く信仰のランナーになりたいという夢と志が与えられ、ひたすら走り続けました。古い昔の体育会系ですから、質より量という時代、横つ腹が痛くても休ませてもらえずに走らなければならない時代、そんな時に必要なものはたった一つ、「気合と根性」でした。しかし、そのようにしていつの間にか「精神力」が鍛えられてきました。

また、開拓伝道に出てから15年以上、病気の治療のため、週に3回のペースで近所の病院に通院し続け、一度も休まずに皆勤賞で打ち続けた注射の数は2500本。「神様、なぜ病気なのですか？」そんな問い合わせを持ちながらも、そのようにしていつの間にか「忍耐力」を身に着けることができました。そしてそれが、間違いなく開拓伝道に大きく役立ってきたのです。もし、私に精神力も忍耐力も無ければ、とつこの昔に開拓伝道を逃げ出していたと断言できます！（もちろん背後の祈り

に支えられました！）

聖書学校時代、諸先生方が言つておられたこと、それは「神様は器を造られる」ということでした。確かに神様は、どんなに時代が変わつても神様の働きに間に合う「器」を造つておられるのです。その土台となるのが「聖書」であり、神様は、靈的な教育と共に心も体もトレーニングしてくださいさるのです。そして、共に生きてくださるイエス・キリストこそ最高のトレーナーなのです！

献身と献身力

牧師になることを「献身」と言います。自分の身をささげることを表していて、それはある意味、神様の御前に一度限りする行為かもしません。しかし、献身したならば、献身し続ける献身力が必要になります。つまり献身力とは、献身を持続させる力であり、そこには間違ひなく忍耐力が伴つた精神力も必要になります。もし、それらが必要のだとしたら、献身は長続きせず、むしろすぐ諦めてしまうのではないでしょうか。

「諦め癖・逃げ癖」それらは実に厄介なもので

あり、身に着けない方が良い悪癖です。十字架から降りることは簡単です。いつでも誰でもできることです。でも知つてほしいです。イエス・キリストは、私のために、あなたのために、最後まで十字架から降りてこなかつたことを！

聖書は、精神を養い、豊かな人間力や人間性を身に着けるためにも有意義な書物です。もちろん信仰の世界は、恵みの世界であつて根性論で成り立つわけではありませんが、豊かな人格者の所には、魅力を感じて相手の方から近づいてくるのではないでしょうか！かつて宮沢賢治が、クリスチヤンであった斎藤宗次郎氏をモデルにして書き上げた有名な詩「雨にも負けず」の中で語つているように。「そういう者に私はなりたい。」と！

日常生活の中に、非日常的な悲惨な出来事、非現実的な非道な出来事が、当然のように起こつてゐる時代、神様の言葉である聖書を読んでいただくことをお勧めいたします。そこに必ず救いがあり、平安な心で生きる豊かな人生が約束されていきるからです。祝福がありますように！